



グランプリ・非住宅部門

奥八女別邸やべのもり(福岡県)
有限会社 井上建築事務所 様

NICHIHA

SIDING AWARD 第35回

2018

施工写真コンテストも35回目を迎えます。
応募総数457作品の中から各賞が決まりました。
今号ではその受賞作品を一挙にご紹介します。

グランプリ・住宅部門

道後南の家(愛媛県)
株式会社小松隼人建築設計事務所 様



総評

最初に、昨年、本賞の審査委員長を退任された杉本貴志さんが、今年4月に亡くなったことを報告していただきたい。杉本さんは日本を代表するインテリアデザイナーであり、サイディングの捉え方において、建築家である私とは異なる考えを持っておられた。にもかかわらず私を審査委員に迎えて、サイディングを構法として捉えている私とは異なり、「表層のデザイン」としてのサイディングの機能に目を開いてくださった。感謝とともに、心から冥福をお祈りしたい。

今年審査委員が飯島直樹さんに代わって2年目である。昨年は初めての審査であるにもかかわらず、入賞作品はきわめてスムーズに決まったが、今年の審査はやや紆余曲折があった。その一因は、突出した作品がなく、どんぐりの背比べだったからである。さらに、入賞候補に選ばれた作品において、サイディングの種類や構法が多様で、評価基準を絞りにくかった点にも一因がある。単一の材料と構法によって、単純明快なデザインを追求する場合の問題は生じない。しかし、デザインの多様性と変化を追求しようとすると、サイディングを他の材料と組み合わせたくなくなるのは自然の成り行きである。

メーカーとしては、前者のデザインをビックアップしたいことは理解できるが、デザインとして総合的に評価しようとするれば、どちらが良いか一概には判断できない。今年の入賞作品が、やや多様に見えるのはそのためである。それだけサイディングの多様性が設計者に浸透した結果だと考えることもできるだろう。その意味において、現在はサイディング・デザインが多様化に向かう途上にあるのかもしれない。

「審査委員長」 難波和彦



KAZUHIKO NAMBA

建築家 東京大学名誉教授
1977年(株)級建築士事務所難波和彦設計事務所を設立。
グッドインテリアデザイン賞、新建築吉岡賞、住宅建築賞、1A環境建築賞、建築学会賞業績賞など多数受賞。代表作に「箱の家」シリーズがあり、標準化・多様化・カスタマイズをコンセプトに掲げた都市型住宅のプロトタイプとしてサイディング開発を手がける。

飯島直樹



NAOKI IIJIMA

インテリアデザイナー。
1985年飯島直樹デザイン室を設立。2004・2014年般社団法人日本環境設計家協会理事長。2011年・2012年工学院大学建築学部教授。ICDデザイン賞、APIDA香港賞などを多数受賞。S・ニューヨーク、blu・bondソウル、PMOオーストラリア、ロジック、工学院大学ライオンズマンション新橋八王子などインテリアから環境全般のデザインまで幅広く活躍。

今年の応募作の中には、大声を発しない控えめな設計の中に、細部の発想や処理において注目すべき設計事例に出会うことができた。ひとつは公共建築賞に見受けられた地域特性の表現である。「道の駅センザキチン」の焼杉、あるいは「群馬県立富岡高等学校」のレンガと木のような、地域の記憶を呼び覚ます素材感の表現として、サイディングの微細な質感が使われていた。

また、制約の多いリフォームもサイディングの出番の新たな領野である。とりわけ「House NI」裏とオモテと境界上のリフォームは大胆極まりない。荒々しい木造現わし2階を支える1階の壁はフラットサーフェイスの量塊で、この為にこそあるサイディングの工法といえるだろう。窯業系サイディングは工業製品であり、部材間の目地という制約が伴う。モエン大壁工法やF・u・g eはその制約の解除だが、一方で、この制約に細心な発想と処理で立ち向かう設計事例も見受けられた。

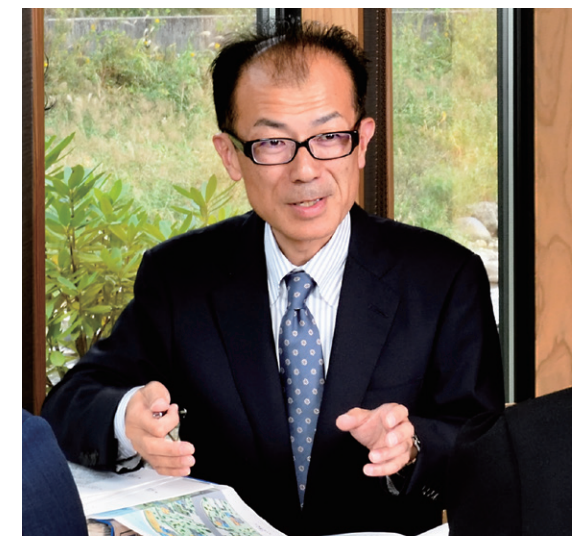
たとえば住宅「ニワエノイエ」は厳密に割り付けられた定尺幅のサイディングの「静」の上部外壁が、その下に展開するピロティの庭ともエントランスとも定かでない空間を、「動的平衡」に誘う。見事な細心によるサイディングの用いられ方である。同様のことはグランプリ作品の目地の見立て(抽象絵画のようなリズムミカルな線)にも言えるだろう。使われ方次第で、サイディングの目地はデザインの味方となるのである。

2011年から2016年までの6年間にわたり、審査委員長を務めていただいた杉本貴志先生が、今年4月にご逝去されました。当時、「風光(HOOKOU)」の開発監修に杉本先生をお迎えしたことが、NICHIHA SIDING AWARDの審査に携わっていただく縁でもありました。

「審査がこの季節(夏)の習慣であると同時に、一つの楽しみもまた」とおっしゃっていたとき、審査を通してサイディングや住まいに対する考えなど多くを学ばせていただきました。ご生前のご厚情に深く感謝するとともに、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

奥八女別邸やべのもり(福岡県)
有限会社 井上建築事務所 様

グランプリ
非住宅部門



井上文雄様

有限会社 井上建築事務所 代表取締役社長
一級建築士

1969年 福岡県八女市生まれ
1995年 日本大学工学部建築学科卒業
1995~1997年 株式会社 前田建築事務所勤務
2004年 法人化 有限会社 井上建築事務所を設立
2014年 井上文雄 代表取締役社長に就任

【審査員評】

福岡県八女市の地域振興施設で、地に足のついた好感の持てる施設デザインである。滞在型観光の離れ宿であり、7棟の平面プランはどれも泊まってみたくなる密度の高さで、レイアウトの間合いが好ましい。山間に入り込むような寄棟と質実なチャコールの外壁によって、分棟間の相互の親密な気配が感じられる。

趣きの異なる客室7棟と
樹木が織りなす上質な空間。

受賞者インタビュー

中山間地域の振興に求められた、
奥八女秘境の離れ宿

ニチハ このたびはご応募くださり、ありがとうございます。グランプリ獲得、おめでとうございます。

井上 ありがとうございます。

ニチハ では早速ですが、「奥八女別邸やべのもり」を受注された経緯についてお聞かせいただけますか？

井上 八女市の公募によるプロポーザルでした。参加した5社の中より選定いただきました。八女市が考えていた施設建設の目的は、「矢部地域に二戸建て形式の宿泊施設を整備することにより、観光客などの交流人口を増加させ、地域の活性化や観光地としての更なるイメージアップにつなげる」というものでした。「やべのもり」が竣工する2年前に、八女市はこの施設のすぐ近くに、観光物産交流施設「杣のさと」をオープンしています。中山間地域振興のため、交流施設に加えて、今回の宿泊施設「やべのもり」を整備して、矢部村の賑わいに寄与しようという考えでした。

ニチハ 提案するにあたり、この土地の視察にいらっしゃったと思いますが、どのような状態だったのでしょうか。

井上 「やべのもり」と名付けていますが、山を切り開いた場所ではなく、この辺りは水田でした。棚田のような感じですが。レベル的には50〜60cmずつぐらいの段差があって、石積みのある田んぼだったんです。

ニチハ そうだったんですね。とても水田だったとは思えませんね。植栽に溢れていて、周囲の環境にとてもなじんでいるように見えます。宿泊施設が7棟ありますが、棟数は最初から決めていらっしゃったのでしょうか？



プロムナードから離れへ招き入れるアプローチ

井上 プロポーザルの段階では、2〜4名を6棟、4〜8名を2棟という要求でした。また、施設はコテージ(貸別荘)のようなスタイルで、各棟にキッチンや浴室を備えたものを要求されました。しかし、設計時の打合せにより、レストラン・フロント(受付)・管理事務所を備えた本館、倉庫が必要との協議を経て、今のような形となりました。本来、設計というのは、真っ白なところに絵を描いていくのが我々の仕事ですが、実は種を明かすと、プロポーザルの段階ですでに造成の設計ができあがっていたんですよ。敷地の真ん中を蛇行する道路も決まっています。ある程度の造成が決まっていたから、あまり変えられなかった。だから、自ずと棟配置もその造成に習う形となりました。

使用商品



モエンエクセラード16
ナチュラルラインV
プラムMGチャコールII
EFX3754T



モエンエクセラード16
ミラージュエルV
エムMGチャコール
EFX3954□
□:工場記号が入ります



2

- 1 周囲の雄大な山々に囲まれた中においても、「やべのもり」の景観はなじんでいます。
- 2 奥八女別邸やべのもりの配置図。7棟全ての宿泊棟の平面プランが異なります。
- 3 レストランでは、矢部川を望みながらお食事を堪能できます。



3



1

**水田に「もり」をつくる。
建築と樹木が織りなす上質な景観**

ニチハ プロポーザルでは「幅広い世代に受け入れられる上質な外部デザインを重視した計画」を強く要望されたそうですね。

井上 私は豪華な離れ宿スタイルの宿に泊まったことはありませんでした。ですから、大分県湯布院、佐賀県武雄温泉などへ視察に行ったり、全国各地のグレードが高い宿の事例を調べたりしました。このような宿を咀嚼した上で、自分が泊まるとすればどのようなものを造りたいか、訪れた方が満足して頂けるにはどのようなデザインにするべきかを念頭に計画を進めました。ただ、できるだけ上質で高級なイメージを限られた予算の中で実現するという、相反する難題に頭を悩ませました。

ニチハ 何にお金を使い、あるいは使わず、高級なイメージを訴求するか、ということは難しい問題です。外観、外構計画で工夫したことや設計コンセプトについてお聞かせください。

井上 今回の提案の重要なポイントの一つが、建築計画とともに植栽や造園計画でした。建築と樹木が織りなす姿が「やべのもり」の上質な景観をつくりだしていると思っています。造園計画では、プロポーザルの段階から、今回初めてお仕事を一緒するヨシダ造景室の吉田はるみ氏に入ってください、協働で設計監理を行いました。施設全体に、クスギやコナラなど、高級な木ではない雑木で統一感を出

しつつ、矢部村に自生するシャクナゲ、ヤマザクラなどの樹木を植えています。シンボルツリーには、イチヨウ、ケヤキ、メタセコイアなどを植えています。

ニチハ 田んぼだった土地を「もり」にするわけですから、相当樹木を植えられたんですね。まるで昔からそこにある風景のように感じられます。

井上 吉田さんがおっしゃるには、敷地の真ん中を通る道路がヒューマンスケールからすると大きすぎると。ですから、平屋の建築にしては背が高すぎると感じるほどの樹木を道沿いに多用することで、幅員の広さを緩和して、よりヒューマンスケールに近い空間を実感できるようにしています。それと、全棟ではありませんが、庭に築山を設けました。排水性という点で水田は真逆の土壌ですから、植木の排水を良くする目的に加えて、プライバシーを確保するために設けました。

宿泊棟の建築に関しては、もりの木々の緑の中に黒っぽい建物が「凜」として佇むよう、景観に馴染むデザインとしつつ、ランドマークとなり得る建築を目指すことを考えました。矢部村の山々の稜線に馴染むよう寄棟屋根とし、軒を1100㎜と深くすることで、壁面への陰影が黒い外壁とのコントラストを生み、表情豊かなファサードを演出しています。



5



4



6

- 4 寄棟屋根の深い軒により、表情豊かなファサードを演出する宿泊棟「高取山」。
- 5 門構えがお客様をお出迎えする宿泊棟「城山」。
- 6 宿泊棟「釈迦岳」では、8畳の浴室でくつろげます。
- 7 和モダンな家具で統一された落ち着いたある上質なリビング。宿泊棟「釈迦岳」。

「宿泊料金も1泊2食で12,000~15,000円と、他の離れ宿スタイルの宿泊施設と比較しても、手の届きやすい料金設定ですね。部屋も広々としていて、家族で来てもゆったり寛げそうです。井上建築事務所様は八女市で非住宅物件を数多く手がけていらっしゃるの、今後是非お手伝いさせていただきたいです」
聞き手(左)福岡営業所 岩瀬、(右)福岡営業所 所長 山本

非日常を体験する宿を 実現するために

二チハ 宿泊棟7棟の平面プランが全て異なっていますが、どのようなコンセプトだったのでしょうか？

井上 秘境の山奥に旅行に来ていただくわけですから、お部屋で過ごす空間は「日常を離れて、非日常を体験する」ことができればと考えました。プランを全て変えたのは、それぞれ個性をもたせて、リピーターの方でも飽きない、全ての棟に泊まっていたきたいという思いで設計しました。およそ15坪~20坪のこじんまりとしたシンプルな宿泊棟ですが、特別な設えを施し、浴室まで長い廊下を歩くタイプや、中庭を囲むタイプ、「土間リビング」のあるタイプ、8畳の浴室があるタイプなど、どの棟にお泊まりいただいてもご満足いただけると思っております。

社内のコミュニケーション、 社外とのコラボレーションが鍵

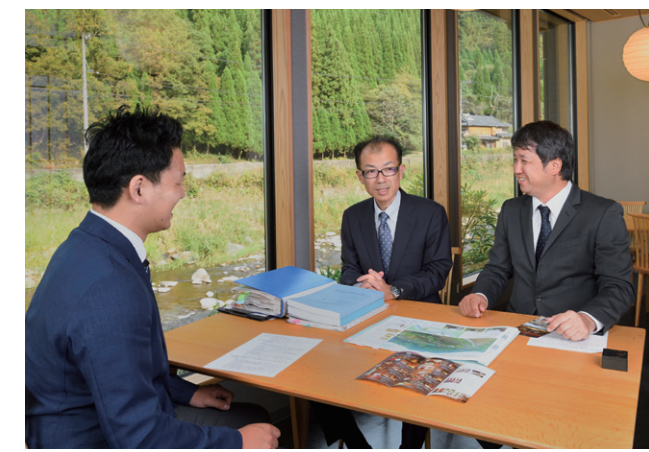
二チハ 先代より会社を引き継がれ、創業48年だそうですね。

井上 そうです。私が49歳で、私が生まれた頃に、父が独立しましたから。父の代から八女市で長年経営してきたので、地元建設会社、工務店との付き合いは多いです。「やべのもり」の工事は全部で5工区に分かれていて、5つの業者さんが入っています。が、ほぼ一緒にお仕事をしたことがある方々でした。ただ長年の経験において、造園設計やサインデザインの専門家に入っていたことは、新たな試みでした。実は、造園を強く意識したきっかけは若手社員の提案だったんです。

二チハ 若手社員のアイデアを取り入れたわけですね。

井上 設計は私を含めて4名ですが、社員とのコミュニケーションをとるように心掛けていて、適切なタイミングでミーティングの場を設けるようにしています。そういう場で、私は発言しなくなるんですが、なるべく我慢して、ベテランや若手社員から、アイデアや自由な発想を発言しやすいように、促すことに努めています。私の役割は、営業、統括、雑用のすべてをこなす経営者であり、総合プロデューサーだと思っています。

二チハ この度の現場では、社外の専門業者様との関係も拡がりましたね。
井上 そうですね。造園やサイン計画の重



木組みの格子を壁面に設けたり、アクセントで石を壁に貼ったり、無垢材の障子、輸入品のタイルを使用するなど、壁紙、床シートをはじめ、室内の設えの一つひとつを拘りぬいて選定しました。私が今回の設計手法で心掛けたのは、「絶対諦めない」ことでした。コストは切り離せないものですが、コストを意識して縮こまっては良い設計はできません。優先順位をつけて、妥協できないもの、減額変更せざるを得ないものをリスト化し、二つとつ予算調整を行いました。最高の宿をつくるためとはいえ、引き算をして予算に合わせる作業は、苦勞の連続でした。不器用なやり方ですが、やって本当に良かったと実感しています。

二チハ 実施設計に予算調整。それらを短期間で行うのは、プランが異なるのでいっそう大変だったのだらうと思います。外壁に関しては、最初からサイディングを考えていらつしやいましたか？

井上 最初は、塗り壁やタイル張りを考えていました。予算的にサイディングを採用したわけですが、外壁と屋根材については、性能を十分に検討した上で決定しました。二チハさんのサイディングは、先ほどお話しした「杣のさと」でキャストینگウッドを、その他の現場でF u g e も採用していますので、ここ数年で性能やデザインが向上していることを理解した上で採用しています。管理棟はタイル調を、宿泊棟にはライン柄と差別化して、建物の役割を明確化しています。



7

要性に気づいたからこそ、それぞれ経験豊富な専門の方とのコラボレーションが生まれました。今回の繋がりにより、今、星野村で行っている保育園のシンボルマークも依頼していますし、インテリア材料のディレクションに関しても協働できればと考えています。能力に長けた専門家とのコラボレーションが、今後大切になってくるのだと思います。もちろん父がしてきたように、建物の設計品質の向上に努めつつ、新しい試みに挑戦して、建築主に喜んでいただくことを第一に、建築家としての「ものづくり」をする喜びを感じ取っていただける仕事を続けていきたいと思っています。

二チハ 本日は本当にありがとうございます。